

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520968

研究課題名(和文) ホノルルにおける戦後移住日本人の「居住空間」とジェンダー

研究課題名(英文) Gender and The 'community space' built by Japanese new first generation in Honolulu.

## 研究代表者

影山 穂波 (Kageyama, Honami)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00302993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ホノルルにおける戦後移住の日本人の「居住空間」とジェンダーの関係を明らかにすることである。そこで日本人女性を中心に展開されるネットワークに注目し、それぞれの活動内容と参加者のライフヒストリーの聞き取り調査を実施した。その結果、彼女たちが、自分たちの必要とおかれた状況に応じて居住空間を形成していることが分かった。彼女たちは、意識的にも無意識的にも周囲に期待される「日本人女性」としての役割を演じており、それがアイデンティティの再生産にもつながっていた。一方でこうしたネットワークを通じて、彼女たちはハワイ社会で自らの居住空間を形成していたのである。

研究成果の概要(英文)：This research is to clarify how Japanese women living in Hawaii build the 'community space' through their networks in Honolulu. In Hawaii there are so many Japanese who moved to Hawaii after W.W.2. They are called Shin-Issei(the new first generation). I focus on those social networks in Honolulu. Based on the results, the following characteristics are drawn. 1)They learn, find and recognize their own community space and try to diversify it according to their needs and the situations. 2)They are negatively affected by Japanese economic problems. 3)Those networks are the place for them to confirm their identity: whether they are a Japanese or an American, a wife or a worker in living in Hawaii. Sometimes they, consciously or unconsciously, reproduce their identity as a conservative Japanese as they are expected to behave as a 'Japanese'. Though those social networks, they build their own community space while trying to assimilate in the Hawaiian society.

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：ジェンダー 居住空間 権力 移住 ネットワーク

## 1. 研究開始当初の背景

近代以降、日本の都市空間は機能的に分化され、ジェンダー関係を投影しながら生産されてきた(吉田 2007, 2006, 影山 2004, 2008)。資本の論理に基づく都市発展において、就労分野においても(吉田 2007)、居住分野においても(村田 2009, 木村 2006, 影山 2004)、ジェンダー役割は機能分化に寄与してきたのである。この構造が、国際移動により移住した人々に与える影響について検討する。

ハワイは、日本人/日系人の人口が全体の 24.5% (2000) を占める地域である。日本との関係は密接であり、国際移動の歴史も深い。1920 年には日系人がハワイの人口の 4 割を占め、日系人の関わる都市空間が形成された (Okamura 2008, Ogawa 1973 など)。当時の女性たちは生産労働を担い、日本的な家族関係を残しながら空間形成に影響を与えてきた (サイキ 1995)。

戦後になると、日本に駐留した米軍兵と結婚し、「戦争花嫁」として多くの女性たちがハワイに渡った。また 1970 年代以降、日本企業が本格的にホノルルへの投資を進めていった。日本からの資本は、ホノルルの都市形成に大きな影響を与えたと考えられる。日本の企業の進出により、駐在員の妻としてハワイに渡った女性たちは、「戦争花嫁」とともに空間形成の一主体となった。アメリカ本土の「戦争花嫁」(安富ほか 2005 など) や駐在員の妻の調査 (Kurotani 2005) は、新しい研究対象として注目され始めた。しかしハワイにおける戦後移住の日本人女性に注目した研究は進んでいない。

そこで本研究では、1950~60 年代に日本から移住してきた「戦争花嫁」と、1970 年代以降に国際結婚した女性、駐在員あるいはハワイに移住した日本人の妻であり、現在なおハワイに居住している女性という 3 者の主体に注目し、そのネットワークと彼女たちのライフヒストリーを探る。「戦争花嫁」というカテゴリーに位置づけられた女性たちは、現在 70~90 歳代を迎えており、彼女たちに関する調査は非常に重要であり、緊急を要している。

女性たちによるネットワークの形成は、地域の課題を考察する機会を提示するとともに、日常生活の充実のための活動の展開によりローカルな空間の創造につながる。ハワイにおける「居住空間」とそこに作用する資本と政治の力による動向を留意し、権力作用としてのジェンダー関係に注目することで、都市空間とジェンダー (影山 2004, 2006) の関係が明らかになる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ホノルルにおける戦後移住の日本人の「居住空間」とジェンダーの関係を明らかにすることである。ホノルル都市圏における日本人、とくに戦後移住した「新二世」の女性たちに注目し、ホノルルの都市

空間が形成される過程を日本人ネットワークとライフヒストリー調査から検討する。ホノルルが都市化される過程において、日本人の影響力は看過できない。ホノルルの「居住空間」形成をジェンダー視点で分析することで、日本文化を具現化する日本人女性によって空間が創造されるダイナミズムを明らかにし、日本社会の影響を可視化する。本研究は、「居住空間」とジェンダーとの関係に関わる研究をさらに深めるものである。

## 3. 研究の方法

ホノルルにおけるネットワーク分析のための聞き取り調査と、「戦争花嫁」、国際結婚した女性、駐在員あるいはハワイに移住した日本人の妻という 3 者の主体の女性たちのライフヒストリーの聞き取り調査を中心に研究を進める。

彼女たちの位置づけを検討するために、『イースト・ウェスト・ジャーナル』の分析を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の背景

1885 年、官約移民として公的にハワイへの移住が始まった。現在 5 世を迎えるハワイにおいて、日本文化を色濃く残した地への移住は、他の地域と比較すれば、敷居の高いものではない。日系人のコミュニティと日本人のコミュニティとは重なってははいないが多様化しており、多くの人が参加することが可能となっている。一方、多民族を抱え、「人種融合」が進んでいると考えられているハワイにも、目に見えにくい階級・人種の格差がある。とくに白人、日系人が中心となった構造が存在している。またジェンダーの問題もそれぞれのアイデンティティに根付いている。

ハワイの産業の中心は観光業である。ついで建設業、農業となる。観光業に付随して、コンドミニウムやホテルの建設などが進められるため、観光業と建設業との関連は密接である。2011 年の全国統計では、ハワイの人口 137.7 万人のうち日本人/日系人は 24.4 万人と全体の 17.8% を占めている。ビザ取得を要望する人は多く、ビザ支援のための会社も多く存在している。

移住した先で、生活のための情報交換を得る手段の一つがメディアである。現地新聞やラジオ、テレビ、コミュニティ誌、インターネットなどから地域の情報を得る。ハワイにおいては、ハワイ報知、日刊サンなど日本語で発行されている新聞を複数あげることができる。イースト・ウェスト・ジャーナルはそのひとつである。ここではこの新聞から移住者を検討した。

イースト・ウェスト・ジャーナルは 1976 年発行の日本語新聞で、月に 2 回 1 日と 15 日に発行されてきた。ハワイには古くから日本語の新聞が存在している。しかし、戦後日本から移動してきたハワイ在住の日本人に

向けての新聞というのは当時存在していなかった。そこで、駐在員、主婦、学生などを中心に日本からの長期滞在者を対象とした新聞を発刊したのが本誌である。2003年まで27年間有料紙であったが、2003年5月1日号より無料紙に変更している。しかし2009年5月以降休刊となった。

イースト・ウェスト・ジャーナルには「頑張る戦後一世」という連載記事が創刊時より近年まで年に数回出されており、この連載と、科研調査に基づき実施したライフストーリーの聞き取り調査から移住女性たちの生活を検討した。

## (2) 戦後移住の日本人女性

### 移住の契機

移住の契機は多様であるが、女性の場合、国際結婚によりハワイでの生活を始める事例が多く見られる。ある戦争花嫁は「今なんか好きな時に結婚できるけど、私の時なんかアメリカ人と結婚するとなると、今年は許可が下りる、来年はダメというふうに、思うようにいかなかった。だから結婚の許可が下りたら一度にパッと結婚式」をしたという。彼女は日系の陸軍少佐と見合いをして結婚し、ハワイでの生活を始めている。日系二世の軍人との結婚も多いのだが、これは日系人が親類のつてをたどり、日本人女性と見合いをする事例も見られるためである。日系人との結婚の場合、夫の家族から「嫁」としての役割が重視され、嫁ぎ先で家父長制の中に置かれることも多かった。一家がご飯を食べ終わった後によく食事をとるといった話も見られた。お見合いによる結婚ではなく、職場で見染められてアングロサクソン系のアメリカ軍人と結婚した例もある。白人社会の中で差別を受けることもあったという。時代的な感覚の違いや文化的背景の違いにより苦労した女性たちは多い。しかし差異を乗り越えてともに生活する中で関係性を築いていった側面も強い。これは近年、国際結婚をして移住した女性たちの経験にも通じる。アメリカ軍人と結婚した30歳代の女性は、はじめは英語で喧嘩をしていたが、そのうちに喧嘩になると日本語を使うようになり、自分の意思を主張できたことで、言葉を超えて感情を通わせ、理解しあえるようになったと語った。

配偶者との死別・離別後ハワイに残る事例も多い。2年で結婚が破綻した女性は、親の反対を押し切ってハワイへ来たため、「おめおめとは帰れなかった」という。「とにかくお金を貯めよう」と日本人バーに勤め、独り立ちをする。結婚生活は破綻しても、ハワイでの生活を続けた。

ハワイという場所を選択して居住する人も少なくない。配偶者と死別してハワイの親類の家に滞在し、居住を決めたり、アメリカの帰りに立ち寄り気に入ったりと、自分の感覚でハワイ居住を決めた人もいる。ハワイの

日本人商工会議所と縁ができた女性武道家は、「天涯孤独な身、未熟ながら頑張ってみよう」と来布している。

「たまたま」「ちょっとしたきっかけで」ハワイに居住することになったと語った人も多い。縁があって、学校に入って、ピザが取れてと、いったきっかけであるが、ここの暮らしに概して満足している。複数の国に居住したことがある駐在員の妻は、多くの国で、日本人であるということで、悪口を言われたり、軽い嫌がらせを受けたりして、不快な思いをしたが、ハワイでは日本人であることが決してマイナスではないことが特徴だと指摘した。日系人/日本人の多さとともに、多様な人種がともに生活するハワイという場所が、彼女たちにとって居心地のいい生活空間として形成されたのである。

### 社会への参加

社会への参加は在住のスタイルで異なる。駐在員の妻として居住している場合、ピザの関係上働くことはできないため、彼女たちは地域でのコミュニティやボランティアなどをして過ごす。一方、単身での就業者や国際結婚により居住している場合、観光業、サービス業、あるいは資格を生かした仕事に従事する女性たちが多く、ハワイでビジネスを展開するにあたり、日本人であることを生かした商売を展開している人も多い。必ずしも従来の日本的経営方針ではなく、さまざまなアイデアを駆使してビジネスに参入しているのである。

「頑張る」という言葉は仕事を続ける女性たちの中でキーワードになっている。「何でもやりだすと、終わるまで一生懸命」やってきた、「私って喜ばれれば、すぐ乗って頑張れるタイプなの」などと努力を重ねていた。「ハワイへ来た以上」「何も形が残せないままでは帰れない」といった言説が、日本とハワイとの距離を示している。ハワイに魅力を感じ、それにこたえるかのように自分たちの仕事を着実にこなしている日本人は多い。対等な立場を勝ち取り、「頑張る」ことで信頼を得ているのである。

女性にとっては、社会に出て働く際に家族の協力が不可欠となっている。彼女たちの言説からは、家族を一義的に考えるという価値観が見られる。聞き取り調査で出会った女性は、自分が家を守る必要があるという日本の価値基準を海外でも長い間持っていたことを指摘していたが、それぞれの人のなかに女性の役割分担の意識は強く存在していた。結婚相手が必ずしも日本人ではないことで、女性の置かれた位置も日本とは異なる形態を見せるが、それでも女性の担う役割分担は機能していたのである。一方で、夫婦で協力し合ってハワイに憧れて居住してきたという事例では、自分たちの方向を探りながら、自分の生活の場の形成に尽力している言説が見られた。

さて、国際結婚後にパートタイムに従事する女性たちも多い。日本では世帯で家計が一つとみなすが、その考えとは異なり、家賃・食費等、自分の生活分は自分で払うという考えのもとでは女性たちは働かざるを得ない。調査を行ったある女性は、結婚してハワイに来て、まだ職場も決まっていないうに生活費の支払いを求められ、最初の数か月は積み立ててきた貯蓄を切り崩したと語った。配偶者の収入はプライベートな問題であり共有するものではないという考えも存在する。一方で、就業後は早々に帰宅し、家事・育児を男女が共に行い、家族と過ごす時間を大切にしているという事例も多い。男性がほとんど家庭を顧みる時間がない日本の就労形態とは全く異なっている。就労時間はフレックスで早朝から働き、午後は早々に退社する人も多い。高速道路の渋滞は午前4時には始まり、帰りの渋滞は午後3時に始まっていることから時間の使い方の多様性を見ることができよう。

戦後日本から移住し、人々が築いてきた関係性と生活空間は、男性のみならず女性にも多様な機会を与えている。背景の異なる文化や習慣と折り合いながら、仕事や、家族との関係、自分の位置の確認などを通して、ハワイにおける生活空間を創造している。

#### 日本人のネットワーク

日本人のネットワークは経済的なものを始めとして多様に展開されている。人々は行為主体として快適な空間を創るべく行動しているのである。ハワイに移住し、アメリカに自分たちの生活の基盤を置く一方で、日本人としてのアイデンティティを強く持つ人は多い。とくに国際結婚をしたことで、周囲が英語あるいは夫の母国語を中心とした生活環境におかれた女性たちにとって、「日本語で話すことのできる」ネットワークは、日本という故郷につながる場所としての意味を持っている。日本語を用いたネットワークを形成し、自らの居場所を作り出している。アメリカ社会に生活する日本人として、自らのアイデンティティを認識できる場所を築いていったのである。社会的ネットワークには自分の意思として参加している人が多かった。家事労働から解放されているわけではないが、家族の同意の有無に関わらず自分の意思で活動への参加を決定している。多くの女性たちにとって、こうしたネットワークは社会空間を形成し、自らのアイデンティティとジェンダー意識を再検討する機会となっている。ローカルなスケールではこうした活動を通じて、自らの居場所を作り出し、それが社会空間を創造する段階の一つとなっているのである。

#### ハワイ移住の女性たち

ハワイでの生活を選択した女性たちは、自分たちの活躍の場を獲得するために努力を

重ねていった。これは、彼女たちが居住空間を形成する過程でもある。戦後に移住した男性が仕事を契機にハワイに来ている例が多いことと比較すると、女性がハワイに来る契機は結婚である割合が高い。使命感や挑戦として移住する事例もあるが、人生を選択する契機となる結婚が海外での生活につながっていることが男性との決定的な違いである。彼女たちは、結婚により家庭という場所を形成しているが、そこで日本的な価値観を持ち続けている人も少なくない。妻、母として、家族を支える存在として、ハワイにおいても日本と同様にジェンダー化された女性の役割に束縛され、それを継承している例が多く見られた。たとえばステレオタイプな日本的な女性らしさやロマンティックイデオロギーに基づく愛情を期待され、それに応えるのである。日本的なジェンダー関係が再生産されているのである。

海外で生活することは異なる背景を持つ空間への新たな闘争であり、家庭や職場などで主体となって居住空間を築いている事例とみることができる。

#### (3) 移住者による居住空間の形成

トランスナショナルな時代と言われ、移住が経済的な理由のみにより説明される時代ではなくなっている。貧困という緊急に迫られた理由ではない、より良い生活を求めた移住が増加している。しかし女性の移住に注目すると、日本においては昇進ができない、保守的な日本社会のなかでの家父長制的な関係の存在に耐えられない、というジェンダー関係に端を発する理由も見られる。海外に来ることで自由になれる感覚は、日本社会における女性の位置づけの限界をも示しているといえよう。

一方、日本の保守的な構造から脱して海外に来た女性たちの中には、「日本人であること」を期待され、その役割を担う側面も見られる。日本的ジェンダー役割の再生産である。日本人女性として扱われる中で、無意識に自ら演じてしまうこの状況が課題の一つといえよう。ハワイの場合、日系社会と戦後移住の日本人の意識の相違のなかで、日本的ジェンダー意識の壁を乗り越えることが困難となっている。

移住に際しては、国籍や永住権、ビザの問題にも注目する必要がある。受け入れ国にとって優先すべきは自国民であり、移住者はあくまでも二番手の住民となる。国籍や永住権を取ることは容易ではなく、そのため国籍や永住権、ビザというステータスは階級となって現出することも多い。海外への移住が選択肢の一つとして考えることができるようになったとはいっても、自らの位置づけを検討したうえでの選択が迫られている。

戦後日本から移住し、人々が築いてきた関係性と生活空間は、男性のみならず女性にも多様な機会を与えている。仕事や、家族との

関係、自分の位置の確認などを通して、移住した地域において居住空間を築いていくことが目指されるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

影山穂波、ハワイと愛媛の姉妹都市交流が生み出す空間、椋山女学園大学研究論集、45 巻、2014、1-11

〔学会発表〕(計 3 件)

Honami Kageyama, Japanese Women's Networks in Honolulu. IGU (International Geographical Union) pre conference (奈良女子大学) 2013

Honami Kageyama, Japanese Women in Honolulu . IGU(International Geographical Union)(ケルン大学)2012

影山穂波、ハワイにおける日本人女性のライフストーリーにみる居住空間、2011 年度人文地理学会大会 特別研究発表 (於 立教大学)

〔図書〕(計 3 件)

影山穂波 (2014) ジェンダー、藤井正、神谷浩夫編『よくわかる都市地理学』ミネルヴァ書房 14-17.

影山穂波 (2014) 海外移住者のライフスタイル、吉田あけみ編『ライフスタイルからみたキャリアデザイン』ミネルヴァ書房 197-210.

影山穂波 (2013) ライフヒストリーと地理学、人文地理学会編『人文地理学辞典』丸善出版 322-323.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

影山穂波 (KAGEYAMA, Honami)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：00302993